

SAIWAI. com

幸支部授業研究会(会員校授業)

9月21日(水)に南河原小学校にて第2回幸支部授業研究会が行われました。授業や会場の準備をしてくださった南河原小学校の職員の皆さん、ご多用の中、参会された皆さん、ありがとうございました。研究協議では、ワールドカフェ方式によるグループでの話し合いで活発な意見交換がなされ、研究を深めることができました。また、講師の先生からは、体育の学習を考えていくうえで参考になる助言をいただくことができました。

以下、提案内容について、多くのご意見、ご感想をいただいた中で、主だったものをいくつかお知らせさせていただきます。

研究協議 ○感想や意見 ☆質問 ◎質問に対する回答・授業者より

《3年生 マット運動「めざせ！マットの達人」》 津本 優葵之 先生

【掲示物について】

- 子供から引き出した技のポイントをまとめ掲示していた。子供たちは活動中に見て自分の姿と比べていた。また、その掲示物を見ながら友達に技のポイントを伝えている場面も見られていた。
- GIGA 端末と掲示を見比べながら動きの確認ができていた。

【GIGA 端末について】

- 使える子はかなり有用的に使っており、写真よりもアドバイスの視点がもちやすい。しかし、使い方が分からないと、撮るだけで終わってしまう……。日々の指導が必要であり、効果的な活用方法を考えながら使用するようにならないといけない。
- 教師の評価にもつながるので活用できるとよい。

【グループ活動について】

- めあてごとに同じ場になった子との即席グループだったが、メリット、デメリットがある。何のためにグループを組むのか、事前に意図をもっておくことが大事。

【内容の系統性について】

- 低学年の遊びから中学年の運動へのつながりはとても大事になってくる。低学年の遊びの中の動きが、運動のどの動きにつながるのかよく理解して段階的に指導にあたるとよい。

【技ができない子への手立てについて】

- 「前転系」・・・頭の着く位置が分かるようにハチマキを巻いていた。
「倒立系」・・・目線をマットに向けるために、イラストを使用していた。
そもそも足が上がらない子に対しては、壁登りをして逆さの感覚をつかんだり、腰の位置を高く上げるようにしたりする。

《6年生 ボール運動 ベースボール型

「ティーボール」～思いつき 打つ！走る！！笑う！！～》 工藤 大輝 先生

【教師の言葉かけについて】

- 教師がその子の得意なことを見ることができており、チームにそれを伝えていた。なので、チームの中でその子の役割がしっかり決まっていたり、子供同士が関わり合っていたりしていた。

【場について】

- どの場もホームの位置を校庭の真ん中に設定していた。その良さとして、ほかのチームの話し合いが聞こえていて、その良いものを自チームに取り入れていたチームもあった。ただし、ほかの場と打つ距離が近いので、防球ネットなどを設置するなど安全面に配慮する必要がある。

【ビート板について】

- 捕球をする際にビート板を使用することで、苦手な子でも捕球できていた。しかし、ビート板を使うことで簡単に捕れてしまうので、ボールの正面に体を移動させキャッチするという動きについてはどうだったのか。

【教師の意図と子供のめあてについて】

○教師は打つ技能に重点を置いていたが、子供たちは打つだけじゃなくて、守り方や守備の配置、ねらって打つなど様々なめあてをもっていたため、教師の意図と子供のめあてにずれが生じていた。教師の思いとともに、子供のめあてに沿った指導もできるとよい。

指導講評

川崎市立小学校体育研究会 助言者 川崎市立古川小学校 総括教諭 新山君代美 先生

≪3年 マット運動 「めざせ！マットの達人」≫

○先生の雰囲気、子どもの雰囲気が良く、学年の協力する姿勢もよく感じられた。

○予備的な運動はスムーズに行えていたが、低学年での感覚づくりが少ないように感じたので、体を支える動き（動物歩き・カエルの足うち等）も入れるとよい。自分の体を支える感覚を知り、感覚づくりを多く経験できるようにしたい。

○自分ができなくてもアドバイスができる力を子供に付けさせる。そのためには、ポイントカードの内容をしぼり、大切なポイントがパッと見て分かるようにする。（「ここ見てね！」が言えるような手立てになる。）

○恐怖心をとるためにスモールステップで考える。（倒立：カエル→カエルの足うち→三点倒立で肩に体重を乗せる感覚→倒立）

○正しい技の見本を視覚的に捉えることが大切。動画の見本とかが有効。

川崎市立小学校体育研究会 助言者 川崎市立東小倉小学校 教頭 福岡雄二 先生

≪6年 ボール運動 ベースボール型

「ティーボール」～思いっきり 打つ！走る！！笑う！！～≫

○体育の学習では、運動の特性（構造的特性と機能的特性）と課題解決学習を合わせて授業を構想することが大事。体育の学習の中でも他教科と同じように課題解決能力を養うために「子供にどこで何を考えさせるか」を教師がもっておくことが必要。

○得点を競い合う楽しさ（機能的特性）を重要視せよと言うが、実際の子どもの願いは「技能（構造的特性）の高まり」なのではないか。子どもにとって一番楽しいのは打つこと。今回の授業は、打つことに特化した学習だった。技能面（打つ、走る、投げる、捕る）のうち、打つことに特化していたので、補球の際にビート板を使うことは良かった。

○子供たちにとって自分のめあてとなるのは技能面である。技能を意識しながらもチームのめあてを考えていけるとよい。

○頭で分かるだけでなく、体でできるようにならないといけないので、体育の課題解決学習は難しい。そのため、体育の課題解決学習を成立させるためには、

①教師自身が基本的な技能を理解し、指導できること

→構造的特性に目を向ける、恐怖心を取り除く

②達成感を感じられるような課題解決にすること

→スモールステップで課題解決する経験を積み重ねる

（課題→解決→新たな課題→解決→・・・）＝深い学びへとつながる

体育の課題解決学習は、難しいからこそ、課題解決が成立したときに、他教科に負けない子供たちの力となっていくのではないかな。

担当：東小倉小学校 内田 達也

文責：幸町小学校 木戸 祐輔